「国東半島の石塔碑の四方仏」について

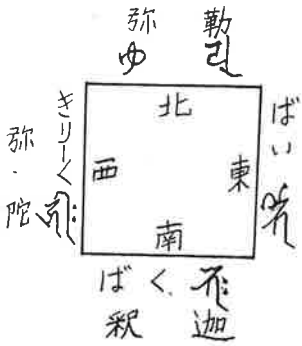
酒井冨蔵

一　四方仏の発祥と種類

塔碑における四方仏の発祥は、法隆寺金堂壁画の四方仏の配置と諸伽藍各本尊と木造塔内仏の配置等にその発端をなし、平安後期以後の石塔碑四方仏に踏襲されたであろうと考えられている。

四方仏には尊容を彫刻せるもの、種子を刻んだもの、種子と尊容を併用したもの、一面のみに一尊容、一種子を彫刻したものなどいろいろある。

四仏を種子で刻んだのは比較的明確に知り得るが、尊容の場合は何仏であるか弁別に甚だ困難さがある。



顕教の四仏

四方仏には顕教四方仏と密教の四方仏がある。

顕教の四方仏＝顕教の数学体系において根本的支柱は釈迦であって、釈迦を位置ずけるためにいろいろな仏があげられているが、それは何れも抽象的な存在であったから、さらに具体的な性格をもち、現実的な人間の苦るしみ、すなわち病苦や死に対する救済の任を負う仏が要求された、そのために創造されたのが。

病苦を救う仏として薬師仏。

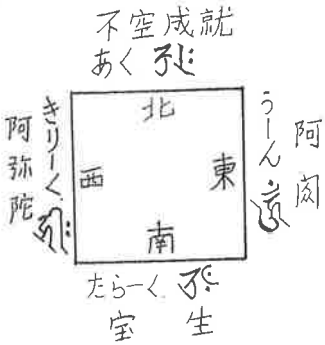
死の救済仏として阿弥陀仏。

未来を救う仏として弥勒仏。

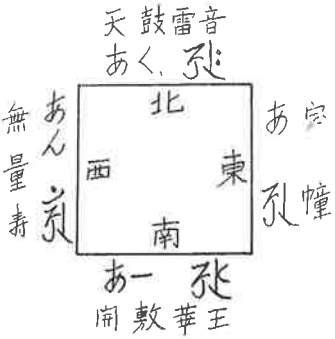
それに主体の釈迦で四仏となる。（四仏の配置は図の如し）。

この四仏は仏教信仰の中心をなすものである。

密教の四仏＝密教の四仏には金、胎両部があり、金剛界四仏（如来）は金剛界曼荼羅五大月輪の儀相に基くもので、胎蔵界四仏は胎蔵界曼荼羅中台八葉院所住の四仏である（四仏の配置は図の如し）。



密教の四仏（金剛界）



密教の四仏（胎蔵界）

二　遺物に見る四方仏

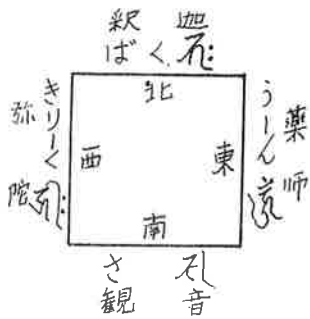
わが国東半島には平安後期のものは木造建築の富貴寺大堂があるが、石造美術品については大体鎌倉期以後のものである、いま左に四方仏を有するものをひろってみると次の様である。

(1)　釜ヶ迫国東塔四方仏

この国東塔には四仏の種子が刻してある（図参照）。

これを顕教の四方仏とみるならば西方の「きりーく」弥陀は弥陀であるが、東方の「ばい」薬師が阿閦の「うーん」をもってきている。これは密教の阿閦は顕教の薬師と通ずるとされている。元来密教の両部曼荼中には薬師を列せず、したがって東方浄瑠璃国の教主たる薬師をもって金剛四仏の東仏たる阿閦と同体なりとするので「うーん」は阿閦すなわち薬師の義である。

北方「ばく」の釈迦は南方にあるべきが北方になっている。これは平安末から後のものは顕教四仏において、弥勒が南方、釈迦が北方に配され南北が反対になってきている。



釜ヶ迫国東塔四方仏
（安岐町大字弁分釜ヶ迫）

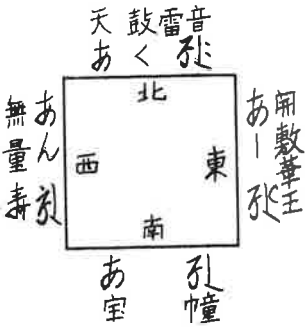
南方は「さ」の観音になっている。これは観音が弥勒と通じたのかも知れない。鎌倉時代のものの中には四仏の一を観音や地蔵におきかえたものがある。

四仏の種子が一見顕教の四仏のようにあっても直ちに顕教四仏と断じられず、中には密教の四仏もあるということも考えねばならぬし、またその逆も同様である。

要するにこの塔の四方仏は顕教の四方仏に近いようであるが、その変化は願主の信仰によるものではあるまいか、鎌倉時代願主の意楽による四方仏の一例であろう。

(2)

大門塔国東型五輪塔四方仏

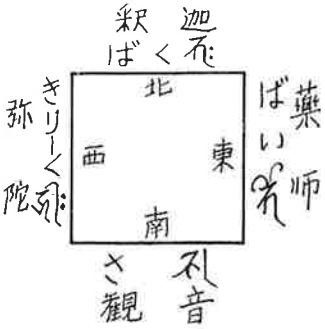


大門坊国東型五輪塔四方仏
（豊後高田市大字中村大門坊）

この塔の水輪の四方に種子にて胎蔵界の四仏をあらわしてある。胎蔵界四仏をあらわしてあるのは今のところ国東半島ではこれが一基でまことに珍らしい存在である。但し東と南が入れかわっている。

(3)

岩脇五輪塔四方仏

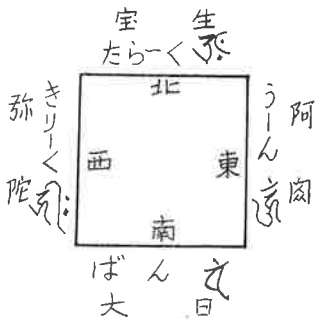


岩脇五輪塔四方仏
（豊後高田市大字嶺崎字横嶺岩脇）

この四方仏の配置は大体において顕教の四仏に近いが、東の「ばり」薬師、西の「きりーく」弥陀はそれとして、南の「ばく」釈迦が北に、北の「ゆ」の弥勒が「さ」の観音で南に配されている。観音が弥勒に通じたのであろう、施主者の意楽もあろう、総じて鎌倉以後にはこんな配置をとっているのが多い。

(4)

後野板碑四方仏



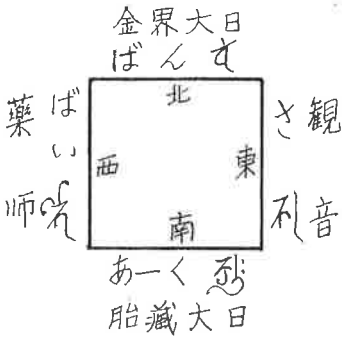
後野板碑四方仏
（大田村大字沓掛字後野）

この板碑は総高四六糎の一石四方四面の方碑で、まことに小さいものだが年号と各面に四方仏の種子を刻してある珍らしい板碑である。

金剛界四仏をあらわしたようであるが「あく」の不空成就のかわりに「ばん」大日をもってきて南に配し、南の「たらーく」宝生を北にまわしてある。施主者の意楽によるものか。

(5)

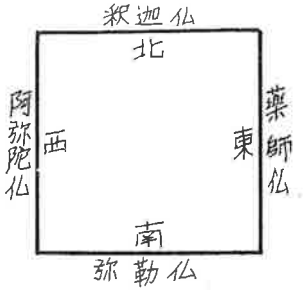
大光寺国南塔四方仏



大光寺国東塔四方仏
（国見町竹田津）

大光寺は臨済宗の寺院である、ここの四方仏はちよっとちがっている。この塔は享保十一年（一七二六～江戸中期）であるから、ここまで時代が下ると別にむずかしいきまりなどにこだわらず、塔形の一般化に伴い在来の像軌を改変し、各宗旨特有の考えをもって、その法語を記すようになったのであろう。

(6) 塔の御堂国東塔四面仏



塔の御堂国東塔四面仏
（豊後高田市大字小田原塔の御堂）

この国東塔の四面仏は他の塔の像容に比し比較的はっきりしている（国東半島では珍らしい存在）。

これは顕教の四仏であろう、それにしては南方の釈迦と北方の弥勒が入替っている。こんなことは前述の如く鎌倉期からはままあることである。

大さは四仏とも同じ、船形の彫りくぼめも同じ、面相は四仏とも荒いタッチである。

東面の薬師仏

蓮花座に結跏趺坐し
右手をあげ施無畏の印を結び
左手を膝上におろし、薬壺（剝落欠如）をもっている姿である。

南面の弥勒仏

蓮花座に坐し
右手は（指を立てたり、屈したりしたところは不明）胸におき左手は掌の上に宝塔をのせ膝上にある。
これは弥勒仏のシンボルである仏舎利塔であるが一部欠落している。

(7) 光園寺国東塔四面仏

西面の弥陀仏

蓮花座に坐し
面相は藤原様の柔和な円満相
耳は下方に細長く垂れ肩にとどいている
衲衣は右肩に少しかかり左手首までおっている。　定印を結んだ通常の尊形である。

南面の像容
（豊後高田市大字玉津光園寺）

この国東塔の塔身四方に四仏があらわされてある。東方の薬師仏西方の弥陀ははっきりしているが南方がはっきりしない、弥勒か釈迦か。

それは図に示すごとく禄落して像容がはっきりしないことと如来像の向って右側に二仏が浮彫されているが何仏か判断に苦るしむ、あるいは塔の御堂の四方仏と同じようにもうかがわれる。

種子の場合は種子がはっきり読みとれれば何仏かは

北面の釈迦仏

欠損がひどいが恐らく
蓮花座に坐し
右手はあげて施無畏印
左手は肘で屈し、膝上に安じていたか、前に出し施支印をなしていたものと思われる。

判明するが、石造品の像容の場合は何れがそれと決しかねる場合が多い。

(8) その他

以上遺物に見る四方仏は、特色のあるもの、特殊例のものを挙げたのであるが、その他国東半島の有銘、無銘の塔碑二十四基はすべて金剛界四仏になっている。

しかし安岐町の護聖寺宝篋印塔、大田村財前墓地の国東塔、豊後高田市大字中村の国東型五輪塔などには塔身に地蔵一尊を浮彫されている、また武蔵町吉弘の西光寺国東塔には、その塔身四面に地蔵ばかりを浮彫した型変りなものもある。

三　結　び

以上によってみるに、国東塔、宝篋印塔、板碑等、石塔碑四仏において、彫像の場合は顕教四仏、種子ならば金剛四仏と大体において言い得るようである。これは石工も顕教四仏はわかりやすく、彫刻もし易い形であるが、密教の金胎四仏は、木彫にも実例が少ないように彫仏がむずかしいというのか、親しめないというのか、あまり造顕されていない。

種子四仏の場合は、石工はその種字が何仏であるかなど知らないでもよい、願主の書いた下図どおりに彫ればよいのであるから、彫仏より更に容易であるにちがいない、かかる意味からして四方仏を種子であらわしたのが多いのでもあろう。

要するに鎌倉時代には彫仏ならば顕教四仏、種子ならば金剛界四仏と定まってしまったようで、特殊例を除けば鎌倉時代以後の種子四方仏はすべて金剛四仏となっている。

（前村長　東国東郡大田村）